サクラ

真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サクラ

【Ｎコード】
Ｎ２９５８Ｄ

【作者名】
真琴

【あらすじ】
友達のいない不安感から始まった、麻里の高校生活。受験によって麻里と離れ離れになった博美。博美以外友達のいない麻里の周りが、高校に入学してから少しずつ変化していき――

第1話

道を点々と淡いピンクに染めていく春の花びらが、暖かい風に吹かれて揺れ動いた。また散る、散る。太い木の幹から伸びる細くて短い枝に咲く小さな花びらは、この世の中で一番短い命だと思う。そして私のこの高校三年間も、きっとそれと同じように一瞬輝いてすぐ消えていく。

私の高校生活は、せめてこれよりも長く生きていてほしい。せめて数日でもいいから、弱くても伸びていてほしい。父にうるさく言われてしょうがなく受けた高校だけど、そこに通うことになったぶん、せめて最低限のラインを超える高校生活は送りたいと思った。

そんな苦い期待をこめながら通った門には、「入学式」と達筆な文字で印刷された縦長の看板が立てかけられている。ケータイで写真を仲良く撮る女子、クラス一緒になれるかな～と話す子。本当なら、今ごろ私もこんな形で高校生活をスタートさせていたはずなのに。あんな事が無かったら・・・・・・。

ほとんどふざけて高校を受けたような私には、たった一人の友達がいた。話べたであるわけでもないのになかなか友達が出来なかった私に、博美は中一のある日声をかけてくれた。それ以来私と博美はいつも一緒で、しかもクラスも三年間離れ離れにならず過ごす事もできた。だから私は、小学校のときとは比べ物にならないほど楽しい学校生活を送ることができたのだ。

父の言うことは絶対に従おうとしない私が父の言うとおりの高校を受けたのも、博美の影響だ。博美は元々勉強のできる子で、対して私はテストの点がどうであろうと何とも思わない人間だったから、小学校の頃から勉強はさぼりがちだった。でも、博美が受ける高校にどうしても私も行きたくて、それでがんばって博美に追いつこう

と勉強した。
　必死だった。一人になるのは嫌だった。小学校、誰からも相手にされず孤独な時間を過ごした六年間。自分でもよく耐えてきたなと思うくらい、それは精神的な戦いの連続だった。ただクラスで浮いてるだけで、いじめられることがなかったのが唯一の救い。他は全部、地獄同然だった。あの頃の自分を思い出すと、鳥肌が立つ。あの時には戻りたくない、絶対に。そのためには何だってする。そして、博美と同じ高校に行くことこそが、今の日常を保っていくために必要不可欠な条件だった。
　受験当日は、不安でいっぱいだった。博美は最後の模試まで合格八十パーセントの数字をキープしていたから、博美が合格ることは間違いないだろう。問題は、私だ。博美は友達が私以外にも大勢いたので、私が落ちても博美は困らないだろう。でも、私は困る。だから、結果はどうあれそれに左右されるのは私だけだ。
　合格発表の日。私は早く結果を知りたくてたまらなかったけれど、その反面結果を知るのが怖い、という感情もあった。でも私は博美と一緒に合格発表を見に行く約束をしていたから、結局のところそんな思いは無理にでももみ消す他なかった。
　結果、私は合格。博美は落ちた。
　それ以来、博美は私から離れていった。学校であいさつしても無視された。「どうして無視するの？」なんて聞けるはずがなかった。博美は怒っているのだ。合格るか合格らないかの瀬戸際だった私が合格ったのに、合格確実と言われたのに落ちてしまった博美の気持ちを考えたら、そんなのすぐに分かることだった。だから、結局今でも博美と私の間には高い壁がはられている。壁を壊す方法が浮かばない私と、ますます壁を頑丈にしていく博美。もう、やり直すことは不可能だった。ただ悲しくて、ものすごく不安だった。これから私はどうすればいいのか。高校進学をやめようかとも思ったけれど、今さらそれは許さないと言う父にこればかりは逆らってもどうにもならず、私はしばらくの間充分な睡眠をとれない毎日を過ごし

た。

第2話

門から数十メートル離れたところに、クラスが書かれたボードが置かれている。高校の合格発表の時もこれと同じようなものがあって、自分の番号を胸をドキドキさせながら探したけれど、それとは全く違う緊張感を今は感じる。

緊張感――つまり博美が落ちたことで、私はどのクラスになっても喜びもしないし悲しみもしないということ。だって、博美がいなければ私の高校生活は終わったも同然だから。ただ、無理やり自分に希望を持つよう言い聞かせているだけ。そうしないと、おかしくなってしまいそうだから。だから、これはもしかしたら、普通の緊張感とは違うのかもしれなかった。もっと、別の何か。これからの三年間に対する不安や孤独、そんなどんな表現にも例えようのないものが入り混じった、ある意味での将来への「緊張」を感じていた。

まるでわたしを見下ろして、更なる恐怖を与えようとするみたいにでかく構えるボードには、ざっと見三百人ほどの名前とクラスが書かれている。その中には、中学校が一緒だった子の名前もたくさんあるけれど、やっぱり知らない子もそれと同じくらいいる。この中に、博美のような優しい子は何人かいるだろう。でも、「博美、もしくは博美以上を持っている」に値する人はきっといないに違いない。

「中川麻里」という名前を見つけるのに、そう時間はかからなかった。二組の表の真ん中辺りにあった自分の名前はなんとなく違和感があって、見てると胸がムカムカしてくる。ボードを蹴ってつぶしてしまうか、それか自分の名前だけ鉛筆で見えなくなるよう黒く塗りつぶしたくなった。

私はここにいて、いいのだろうか。いる資格なんてあるんだろうか。誰かにいてもいいよと言われたって、どうせ居場所なんて見つかるはずもないのに。不安が胸の奥からチクチクとしたトゲの痛み

で湧き上がってきて、思わず両手を強く握りしめた。
「あ、肩」
「え？」
「サクラがついてる」
「サクラ？あぁ、ほんとだ」
私のすぐそばで、女子二人が笑っている。その話を聞いて、なんとなくそんな予感がして、自分の肩に手を置いてみた。すると案の定何かに触れる感触があって、手に取ると一枚のサクラの花びら。
いつまでもボードの前にいるわけもいかないので、手の中にあるサクラの花びらをとりあえず胸ポケットに入れて、校内に入るため玄関へと向かうことにした。
玄関に入ったとき、思わず圧倒した。高校生全員ぶんの靴が収納されるように用意された数えきれないほどの靴箱が、それぞれ一定の間隔を開けてきれいに並んでいる。白く塗装され中が二つの段にわかれているタイプの靴箱は、長い間そのままなのか所々ペンキがはげていて、なんとなくその部分をいじってみたくなった。
自分の名前の書いた紙が貼られてある靴箱をようやく見つけ、家から持ってきたばかりでまだほとんどはいたことのない上靴にはきかえる。ブカブカだけれど歩くのに困らない、という程度のサイズの靴を選んで買ったから、最初のほうは足に違和感が残るだろう。脱いだ通学靴を靴箱の中にいれて、一年二組への教室へと慣れない足つきで向かった。

第3話

教室は入学を喜ぶ生徒で騒がしかった。

そんな中、気持ちを分かち合える人がいない私。自分の座る席にカバンを置いて、途方に暮れていた。これからは誰にも頼ることができない。学校では、一人で生きていかないといけない。改めてこの事実を認識した私は自動的に、自分の席に座ってホームルームが始まるのを待つ破目になった。

こういうのが、私は一番嫌いだ。たとえば家から外に一歩も出ずにずっと一週間誰とも話さず過ごすのだって、私なら耐えられる自信がある。でも、今みたいに周りが楽しそうに友達とはしゃいでいるのに自分だけがこうして時間が経つのを待っているだけ、なんていうのは、なんだか胸が軋むのだ。老化した畳が音をたてるみたいに、ギシギシ、と。これは体験したらわかるけど案外痛くて、嫌なくらい心の弱い部分をついてくる。朝どうしても起きられず遅刻してしまう博美が登校するまでの間、私はよくこの痛みを我慢したものだ。

これからはこの痛みが、ずっと続く。前を見ると嫌なことばかりありそうだから、この高校生活中はあえて今だけを見るようにしようと思った。

その時、待ち望んでいたチャイムが鳴った。初めて聞く高校のチャイムの音は、中学校のときとは違い、どこかで聞いたことのある有名な曲のメロディー調。チャイムを聞いて、みんなぞろぞろと自分の席に戻っていく。そして全員が席に座ろうとしたのとほぼ同時に、先生がドアを開けて入ってきた。

さっきまでと比べて、少し教室が静かになった気がした。いや、どちらかといえば空気が変わった、といえる。やっぱりみんな、初めて見る先生がどんな先生なのか気になるのかもしれなかった。

どっちかといえばかっこいい部類に入る顔つき。三十前半で、青

と水色の斜線が入ったネクタイをしめている。どこかで見たけど覚えていない、脇役の脇役であまり売れていない俳優のような、大してめだつわけでもないけれどそこにきちんと存在している、といった感じの雰囲気を漂わせている。

ホームルームが始まり、先生は白チョークを持つと、黒板に何やら書き始めた。たぶん自己紹介をするため名前を書いているのだろうと思ってたら、案の定そのようだった。「若葉瑛太」と書かれた字はとてもきれいで、これは黒板なれしてると見た。つまり、黒板に字を書くことに慣れている、ということ。たまに無駄に年だけとって字はうまくならない先生がいるけれど、若葉先生にはそういう「キツい欠点」というのはなさそうだった。

「えー、僕は若葉瑛太といいます。現国の担当です。高校初日で、みんな楽しみだったり不安だったり様々だと思いますが、このクラス全員で一年間いい思い出を作っていきましょう」

クラス全員、というところに胸が痛んだけど、それを除いて若葉先生の第一印象はまぁ悪いほうではなかった。といっても、これは私の個人的な感想だから、他の子たちが何を思っているかは分からない。もしかしたら、若葉先生を心の中でけなしているかもしれないのだ。

入学式が始まるまでのホームルームの間、恒例の自己紹介が行われた。先生によって自己紹介の提案する内容は違うけど、若葉先生の場合名前とあだ名、入りたいクラブを言うだけの簡単なものだった。でも、私はいつも以上に気がひけた。元々人前に立って話すのはそんなに好きじゃないし、何より自己紹介をしているときの視線がいや。そして、心細い。やっぱり、博美がいるのといないのとでは、精神的な面で全然違っていた。

自己紹介はなんとかやりとげることができて、落ち着きを取りもどしたのも束の間、すぐに全校生徒が体育館へ移動、入学式が行われた。

「新入生の皆さんは、後半年もしたら、文系か理系か、どちらの

道に進むか決めなければいけません。まだ将来の目標が定まってない人も、勉強や読書、クラブなどに大いに挑戦し、自分が進むべき道を見つける努力をしていきましょう」

校長先生は私たち新入生の顔を見ながら語りかける。

将来の目標、私にはあるだろうか。高校一年、まだ始まったばかりの高校生活だけど、あっという間に時は過ぎていく、サクラの花びらが散っていくみたいに。今まで他人事みたいに考えてた事、でも私にもいずれ関係してくることなんだ。分かっている。ただ、やっぱり目標が無いのにがんばることなんてできないよ。頼みの綱の博美も失ってしまって、私にはもう何も残っていない。もはや生きているだけで他は無価値の私、この世に意味なんてあるんだろうか。無い気がする。勝手に周りの変化に踊らされているだけで、ほんとは人生のほとんどが無意味なもので構築されているんだと思う。気づきたくなかった。

誰かといたい。

誰かといれば、こんなリアルな不安、忘れることができるのに。

第４話

入学式が終わり、翌日には始業式。そして実力テスト。土日の休みを挟み、月曜から平常授業が始まった。

さすが、博美が目指していた高校。実力テストは難しくて、これは平均点が驚くほど低くなるだろうと思っていたら、私はクラスの中でも最下位に近い順位だったわけで。授業だって中学とは比べ物にならないほどスピードが速く、私が焦っている間にも皆は器用に友達を作り、入学から１週間経ったばかりにもかかわらずもう仲良しグループが決まっている、という状態だった。

そんな中取り残されてしまった私、と前の席の彼。彼の名前はまだ分からなかった。入学式、担任が名前を呼ぶと生徒は返事をし、入り口から体育館へと入場した。その時彼はいなかった。確か当日のホームルームで欠席はいないはずだったけど、でも彼はいなかったのだ。理由なんて、赤の他人の私に分かるはずがない。ただ分かっていたのは、彼は私とは違い一人でいても苦には感じないということだけだった。

また、徐々に学校に慣れてきたのか、遅刻がめだつようになってきた。遅刻する人、というのはどこの学校でもそうだけど大体決まっていて、遅刻グループ、といってもほとんど単独に等しいけれど、谷川夏美は今週毎日遅刻し続けている。谷川夏美はだいたい二時間目の授業の中盤くらいに黙って教室に入ってきて、教卓に遅刻理由の書いた紙を置く。一番後ろの窓側の席に度がすぎるほどクールに座り、長い髪を肩の後ろに持っていく。そんな、皆が思わず一目置いてしまうような大人っぽい子。

私はよく分からない男の子とクールな女の子、この二人を観察するのはあの胸の軋みを紛らわすためにはうってつけだと思った。私は、全然おもしろくなくて聞いてて眠くなる授業中二人の様子をぼんやりと眺め、黒板に先生が何かを書くと気分が乗ればノートに

写す。十分休憩では、五十分ヒマの砂から耐えて逃げ続けることができた自分へのご褒美として仮眠をとる。そんな毎日。

たまに博美のことを考える。高校に落ちて近くの私立に通うことになった博美は、もう私の存在なんて忘れてしまっただろうか、とこれくらい。私はできる限り、博美とのことは思い出さないようにしている。早く忘れて、高校生活に集中したい。

第5話

元々運動はできないほうだったけど、まさかこんな間抜けな転び方をするとは。

体育の授業、バレーのトスの練習をしていて上にあげたボールが後ろの変な方向に飛んでしまって、それを追いかけてたら自分の足につまづいて、派手に転んだ。しかも立とうとしたら右足首がジンジンと痛む。どうやら、足首をくじいてしまったらしい。

「中川さん、大丈夫？」

先生が私のところにやってきて、立てずにいる私の横にしゃがんだ。騒ぎに気づいたのか、みんなトスをやめて私の周りを囲む。「どうしたの～？」とだんだん大きくなっていく輪に、なんだかものすごく情けなくなって、

「あの、大丈夫です。ちょっとひねっただけなんで」

「でも、立てないんでしょ？」

「いえ、立てます」

別に皆に迷惑をかけたくないわけじゃない。ただ、無性にこんな自分が嫌になった。だから、無理にでも立とうとした。立って、私はほっといてくれればいいという意思を示したかった。

だが、こういう時に限って思い通りにいかないものだ。言葉どおり立つところまではよかったものの、一歩踏み出すと同時に軽い電流が流れる感覚を足首に覚える。「痛っ」と小さく叫んで、もう一度床にどてっと座り足首に手を当てた。

「保険委員、中川さんを保健室まで連れてって」

これ以上成すすべがない私は、惨めな思いでうつむいていた。「保険委員は誰？」という先生の声に、数秒遅れてから「私です」と聞きなれない声が聞こえた。声のするほうを見てみると、谷川夏美がちょうど頭の高さまで手を挙げていた。

第6話

幸いなことに、体育館からそう遠くない位置に保健室はあった。身体測定のときに保健室には行ったから、場所に迷うことはなかった。

壁伝いに歩くゆっくりとした私の歩調に、谷川夏美は何の文句も言わず合わせてくれた。そればかりか、「大丈夫？」とまで心配されて動揺した。胸がドキドキしたまま、自分の足で保健室へ向かった。

「保健室」という上に掲げられたプレートが見えて、私はやっとホッと息をつくことができた。そして改めて谷川夏美を見てみた。身長は私とだいたい同じくらい、どちらかといえば私のほうが小さいだろう。また、顔はよく見るとどこかのしっかりした天才子役に似ているような印象を受ける。若葉先生もそういえばそんな雰囲気を持っていたけど、谷川夏美のはこれと同じような感じがした。そして、一番思ったこと。もしかしたら、谷川夏美は優しいのかもしれない。私は反省した。本当にその人に触れてみない限り、人間性なんて分からないんだと思った。

「失礼します」

谷川夏美が私の代わりにドアをノックする。別に手を怪我したわけじゃないんだから、ノックくらいできるのに。でも、違和感はなぜか無かった。

保健室は全体的に白がベース。壁も床も棚もベッドも、そのほとんどが白。清潔感があって、ここにいると心の恐怖や不安が全て取り除かれそうだ。

上靴を脱ぎ靴下で床に上がると、

「あぁ、谷川さん。久しぶりね。今日はどうしたの？」

保健の先生は女の人。白衣がとても似合っていて、目が細いせいかどこか微笑んでいるようだ。谷川夏美とはなぜか知り合いらしく、

二人の間には私には到底見る事のできない絆の糸があるように思えた。
「今日は私じゃありません。この子が足首をひねっちゃって。それで、私は保険委員として付き添いで来たんです」
「あら、そうなの。じゃぁ、ここに座って」
先生はすぐ横の長いすに座るよう促し、私は言われた通り座る。
「ひねったのはどっちの足？」と聞かれたので「右です」と答えると、「靴下脱いで」先生は急に真剣な顔つきになって私の右足首を触り始めた。適度な力で足首の所々を押し、「ここ痛い？」と何度か聞かれて、「ちょっと痛いです」「いいえ」などと答える。
こんなやり取りが数十秒続き、先生は顔をあげて言った。
「軽く腫れてるけど、大丈夫よ。氷水につけて、包帯で固定したら一週間もすれば治るはず。用意してくるから、ちょっと待っててね」
「は、はい」
ちょっと足をひねっただけなのに。何かが違っていた。
「先生、すごいでしょ」
先生のテキパキした動きに見とれている私のそばで、谷川夏美が感心するように目を輝かせて言った。
「私先生に憧れてるんだ。優しいし、どんな子にも平等に接するし。学校に来たくない子には、無理に来なくてもいいんだよって慰めるし。他の先生とは違うんだよね、うん。どこか違う」
そして一拍置くと、
「あなたもそう思わない？」
私の顔を見、意味深な表情で言った。本人にはそのつもりは無いのかもしれないけど、少なくとも私にはそう見えた。谷川夏美はクールな分、何かを秘めているような気がした。
「誰か寝てるね」
「え？」
「ほら、ベッド。一つカーテンが閉まってる」

谷川夏美が指差す方向には三つのベッドが置いてあって、そのうち一番奥にあるベッドのカーテンが、確かに何かを包みこむように閉まっている。風邪でもひいたのだろうか。

「はい、おまたせ～。氷水持ってきたよ」

香坂先生が、透明なビニール袋に冷たそうな氷水を入れて持ってきた。

「ありがとうございます」

「袋を破っちゃわないようにだけ、注意してね。って、高校生なんだからそんなことしないか」

「どういうことですか？」

「先生、実は昔小学校で働いていたことがあったの。その時わんぱくで怪我をして保健室に来てばかりの男の子が、しょっちゅう氷水を廊下にばらまいて担任の先生に怒られてたのを、今でも覚えてるのよ」

香坂先生は、チャイムが鳴るまで私と谷川夏美に、小学校での思い出話をしてくれた。嫌いな算数の授業になると、必ず保健室に来て遊ぶ二年生の話や、好きなコイが泳ぐ池の周りで遊んでいて池に落ちてしまい、全身びしょびしょの状態で着替えを取りに来た子の話。どれもおもしろくて、時間があっという間に過ぎていった。

この話を聞いて、香坂先生は谷川夏美の言うとおり、生徒思いで優しい先生なんだなと思った。入学当時は自分の居場所なんてあるはずないと思っていた私。だから、高校でこんな楽しい時間を過ごせるなんて、正直考えてもいなかった。

もしこれから不安になったり寂しくなったり、時間をもてあましたくなったら、ここに来て香坂先生と話したい。まだ居場所が見つかったとは言えないけど、ここにいたい、と思える場所が高校にできたことは、私にとってすごく大きな事なんじゃないか。そんな気がしていた。

第7話

保健室で氷水をもらい少しは良くなったものの、数日間は右足だけ引っぱるような感じの歩き方になった。しかもその期間中スポーツテストが重なり、体操服を忘れたごく数名と一緒になって、私は教室で自習をすることになった。

五月の陽気が心地よい。教室はちょうど過ごしやすい温度で、半分開いた窓から春の風が吹き込んでくる。教室には、三年が二人と二年が一人、それに私の他に一年がもう一人いた。そしてその一年は、私が密かに目をつけていた男の子だった。

「麻生くん、この問題答えて」

ちょうど昨日の数学の授業で、先生に宿題の答えを黒板に書くよう指摘された麻生くん。彼はその男の子だった。麻生くん。初めて知った、彼の名前。ふうん、麻生っていうんだ。けれどその程度にしかまだ思っていなかった。

席はどこでもいいというので、私は外の見える窓側の席に座った。空から覗き込むようにして見えるグラウンドでは、ちょうど２０メートルシャトルランが行われている。しんどいんだろうな、それに比べればまだ私はましか。自習してるだけでいいんだから。

「あのさ」

外を眺めていると、急に誰かが声をかけてきた。

「ここ、座っていい？」

振り向くと、私の右隣にある席を指差して麻生くんが立っていた。

「あぁ・・・・・・うん」

私は正直急に声をかけられて戸惑っていたけど、麻生くんは全然私に話しかけるのは平気らしく、私の許可を得て隣の席に座るとポケットから文庫本を取り出して読み始めた。何を読んでいるのか気になった。でも、自分からは聞き出せない。ただ、比較的薄めの本でそんなに難しそうな内容ではないことが推測できた。

「何見てんの？」
「えっ」
「いや、なんかこっち見てるなって」
「あ、うん・・・・・・別に。何も無い」
麻生君の隣に座っているのがなんかいやになって席を移動した、右足を引っぱりながら。そしたら麻生君はそれが目に入ったみたいで、「足けがしたの？」と軽々聞いてきた。
「うん。ちょっと、足くじいたんだ」
麻生君と私の間に、二つ席があるような形になる席に座って言った。
「なんで？」
「体育の時間、バレーだったんだ。トス上げてたらこけちゃって」
「まぬけなんだな」
「え？」
「谷川に付き添いに来てもらったんだろ。まぬけだよ、あんた。あいつみたいな奴に肩貸してもらっちゃったら、あんた終わりだよ。いくら谷川が保険委員だからって、さすがに断るだろ、普通」
麻生君の言っている意味が分からなかった。なんで谷川夏美に助けられるのが、そんなに悪いことなのか。まぬけ、と言われるほどのことなのか。どちらかといえば、足をくじくほうがまぬけなんじゃないだろうか。それに、どうして麻生君がこの事を知っているのだろう。
「ちょっと待ってよ」
「ん？」
「麻生君は、何を言いたいの？」
「何をって、言ったままのことじゃん。谷川とは関わらないほうがいい。そういうことだよ」
「どういうこと？」
麻生君は、全く私の言うことを理解してくれない。もし理解したとしても、麻生君はひねくれたことしか言わないような気もする。

といっても、ちゃんと説明できるほどの語彙力と会話力がない私が結局は悪いのだけれど。
「この前はあいつと仲良さそうだったけど、何も知らないんだな。あいつ香坂先生と仲良さそうだっただろ」
「うん」
「うんって、それだけ？やっぱ知らないんだな。まぁ、おまえが知ったところで変わる問題じゃないけどな」
まるで私には何の力もない、みたいな言い方。でも決して悪口を言われているようには感じないし、麻生君が悪い人にも思えない口調。
麻生君の性格が読めない。相手のことを知ってからじゃないとほとんど話すことができない私にとって、麻生君みたいなタイプは致命的だ。今までこんなことなかったから、私はどうしていいか分からず戸惑っていた。
少しでも麻生君の情報を手に入れ落ち着きを取りもどすために、「てかどうして麻生君が、谷川夏美が私の付き添いで保健室まで来てくれたこと知ってんの？」と無理やり話題を変えた。
「知ってるも何も、見てたからさ」
「見てた？」
「あぁ、保健室ベッド一つ埋まってただろ。あそこに俺いた」
保健室のベッド、その言葉で思い出した。
そういえばあの時一つのベッドが埋まっていた。風邪を引いた誰かが寝ているのかと思えば、まさか麻生君だったなんて。
「だるかったんだよね、ちょうどバスケのテストだったから。体育は体を動かす唯一の授業、でもそれも結局は他のつまらない授業と変わらないんだよ。全ては点数。たとえば美術だって、人の感じるものは人それぞれなのにそれを数字で表すだろ。俺、あーいうの嫌なんだよ。だからサボった」
あながち麻生君の言うことは正しいような気もして、
「そっか・・・・・・点数か」

特に深い意味も無くポツリとつぶやいてみる。
麻生君は再び文庫本に目を落として、読み始める。
麻生君が入学式に来なかった理由。なんとなく分かった気がした。点をつけられるのが嫌いだという麻生君。きっと、先生は嫌いだろう。だって先生って皆の個性とかそんなこといって、結局は生徒の学力にしか興味がない種類だから。その中のトップ、つまり校長の話なんて聞きたくないに違いない。ただでさえ入学式は厳かな雰囲気で、協調性のなさそうな麻生君にとってはつまらないもの以外の何物でもないだろう。
麻生君は、周囲に溶け込まない性質だけれど、私は無難に来週から始まる中間テストの勉強をする。範囲が広く全然終わらない問題集の解答欄を、がむしゃらに埋めていった。

第8話

私の家は新築マンションの最上階。まるでスキャンダルに追い込まれた芸能人がこもる部屋、みたいな構造になっている。父は大学の教授で、家に帰ってこない日も多い。そんな父に愛想がつきた母は二年前家を出てどこかの海外に住んでいるという話を聞いたけど、ほんとのところは分からない。父の言うことは嘘まみれだから、信じようにも信じられないのだ。

家の鍵を開け、中に入る。

あれだけ学校で独りが嫌いだと言っている私。そんな私が、家で一人で寄るご飯を作って食べてテレビを見て睡眠、なんていう暮らしは無論できない。動物を飼うのが好きだった母が家を出て行ったときの唯一の忘れ物であるチャッピーが、私の心を癒してくれる。

学校でボロボロになった心の傷を修復しようとするかのように、チャッピーが玄関にいる私めがけて、一目散に走ってきた。

「ただいまチャッピー。いい子にしてた？」

チャッピーは犬だから、もちろん返事を返さない。でも良いのだ。チャッピーと私は話しをすることはできないけれど、チャッピーと私が離れ離れにならない自信はある。こういう絶対的な安心感。私の一番求めているものが、チャッピーには備わっているのだ。

チャッピーと目線を合わせるようにしゃがむ。するとチャッピーは、小型犬らしいどこか可愛らしげな目で私を見つめてきた。いつもなら思いっきり飛びついてくるところなのに、何か今日は違う。

もしかして、何かやってしまったんだろうか。とっさにそう感じ慌てて部屋へと進むと、案の定ゴミ箱が荒らされていた。昨日ゴミを出したばかりだったので床に散らばっているのは小さな紙くずだけ。どうやら、被害は少なかったようだ。

「チャッピー、ゴミ箱は倒しちゃダメっていつも言ってるでしょ」

私がチャッピーにそう軽く注意すると、チャッピーは私に許しを

請うみたいに「クーゥ」と小さく鳴いた。こういうまるで弟みたいなチャッピーが、私は好きだ。もしかしたらチャッピーは、私を見捨てて家を出て行った母が最後に残した、私への贈り物なのかもしれない。時々そう思うこともあるほど、チャッピーが愛しくなる。

「もういいよ。これからは気をつけようね」

そう笑顔でチャッピーの頭をなでてあげる。

「クーゥ」

「よし、じゃぁ散歩行こっか。着替えてくるから、ちょっと待っててね」

散歩、という言葉を聞くと途端に部屋の中をかけ回るチャッピー。この動きを止める方法を私は知っている。私は走り回っているチャッピーの顔面にいつも散歩のときに使っている黄色の首輪を持ってきて、チャッピーがそれに気づいたのを確認してから「こっちだよ」と言い、脚の短いテーブルの上に首輪を置いた。

チャッピーは、首輪の前から一歩も動かない。じっと首輪を見ている。

猫が丸いものを好むように、チャッピーはこの首輪が大好きなのだ。

第9話

チャッピーは基本的に散歩好きだから、私は極力時間を見つけてチャッピーと外を歩くことにしている。平日は最低一回、休日は二回。別に義務感とかじゃなくて、私がして楽しいことがそのままチャッピーのためになるのだからそれに越したことはないのだ。

「チャッピー、行くよ」

チャッピーと一緒にマンションを出て必ず向かうのは、小さな公園。そこまでのルートも決まっていて、公園に着くまでにだいたい五分かかる。そこでチャッピーが遊ぶのに十分、そこからまた家に戻るから散歩にかかる時間は二十分前後になる。ほんとはもっと散歩に時間をかけたいのだけれど、父が帰ってこない日家事は全て私がしないといけないから、好きなことに時間をかける余裕は実際私にはほとんどないのだ。

公園に着くまでには、様々なものがある。といっても基本的には道の端々に木が植えられたレンガの道を歩くわけだけど、すれ違う人も色々でそこは同じ道でも日によって違う道になる。季節が変われば木の様子が、朝から夜になれば太陽が月に。殺風景ながらも、そこにはこの街唯一の自然がある。

公園の入り口から中に入ると、水色のジャングルジム。三つの高低差のある鉄棒と、ペンキ塗りたてと紙がはられたすべりだい。二つのそれぞれギシギシ鳴るブランコでは、小学生が立ちこぎをしている。

「ワンッ」

チャッピーが急にほえた。こんなに威勢のいいチャッピーの鳴き声は久しぶりで、何があったのかとチャッピーの視線の方向を見た。

公園の木造ベンチに、麻生君が腰かけている。ケータイをいじっているようだ。学校以外で同級生の誰かと会うのは高校になって初めてで、しかもそれが麻生君だなんて。学校の何かを学校以外の時

間帯に、ましてやチャッピーとの散歩中に持ち込むのはいやだったけど、無視して公園に入るわけにもいかないので一応声をかけてみた。

「あの・・・・・・」

麻生君は私に気づいて、「おお」と軽くうなずいた。

「で、何？」

素っ気なく麻生君が言うので、

「え、ううん、別に何も」

「そっか」

気遣い、というのが麻生君には無いらしい。麻生君は再びケータイの画面に目を落として、どうやらメールを打っているようだ。親指が慣れた手つきで動いている。

短い会話が終わり訪れた沈黙に息苦しさを感じていると、ケータイを閉じた麻生君が、

「その犬、おまえの？」あごでチャッピーのほうを差し、私を見て聞いた。

「うん、私の犬。今散歩中なんだ」

「散歩か。いつもここ来てんの？」

「まぁそんなところ。チャッピーがここの公園好きで、散歩の時にはここで遊ばせるの」

「へぇ、この犬、チャッピーっていうんだ」

「そうだよ」

「なんか変な名前だな」

「変？」

「うそ、かわいいよ。センス悪いけど」

麻生君の言うことがどこかおかしくて、クスリと笑ってしまった。かわいいのにセンスない、というのはよくわかんないけど麻生君らしい気がした。麻生君を見るとなんと麻生君も笑っている。こんな人でも笑うのか、と思うと何だか楽しくなってきた。

そこで思い切って、

「あのさ」
と自分から話を持ちかけてみた。
「なんで今日スポーツテスト休んだの？」
「スポーツテスト？何それ」
「何って、とぼける必要ないじゃん。もしかしてまたサボり？」
「当り前じゃん。おまえ、今日俺が言ったこと忘れてるだろ。俺は点数がつけられるものは全部嫌いだって。テストっていう名前がつくやつは全部そうだろ。でもそんな理由で休むって言ったら先生怒るに決まってるから、朝熱測ったら微熱でした、ってウソついてやった」
「そっか。すごいね」
「すごいって、なんか大げさだな。誰だってウソくらいつくだろ」
「そうじゃなくってさ。だから、なんて言うのかな。あれだよ、麻生君はそうさっぱりしてるっていうか。こう思ったらこうするって、感情だけで動くっていうか。今日だって急に私の隣の席座るし、正直びっくりした」
「ふうん・・・・・俺もびっくりした」
「え？」
「おまえまさか、そんなに喋れるなんてな。学校ではずっと黙ってるし、友達いないみたいだし、暗いやつって思ってた。でもさっきだって俺に話しかけてきたのはおまえだろ。なんか、拍子抜けした」
麻生君は嫌いじゃない。でも、最低だと思った。
たとえ麻生君にその気がないとしても、私は傷ついた。
「どうした？急に無口になったな」
勝手に私の中に入ってきて心をいじくり回して楽しんでるみたいで、急に麻生君が悪い人に見えてきて、ものすごく言い返したかったけどどう言い返したらいいか分からなくて、そんな自分が憎くてイライラして、結局怒りや失望などの感情を一つも表に出せなかった。

「チャッピー、行こ」
なんとか言ったその言葉を最後に、私は麻生君を一回も見ないまま公園を出ていった。散歩道の風景なんて見てる余裕はなかった。ずっと下を向いて絶対に途中で足を止めないように、一気にマンションまで向かった。早歩きで足首が痛んだけど、そんなの気にならなかった。マンションに着いて入る。一階に止まっていたエレベーターに乗る。ボタンを押して、ドアを閉める。
途端、体から力が抜けて、座りこんでしまった。
やっぱりダメなんだ。教室で麻生君が話しかけてきたとき、実はホッとしていたのに。これで友達ができるんじゃないかって。でも、もう全部終わってしまった。
「クゥ」
チャッピーが涙ぐんで鳴いた、ように見えた。チャッピーだけは私のことを分かってくれている。チャッピーがいるからこそ、私は幸せでいられるんだと思った。
「チャッピー、ありがとね」
この溢れ出てくる感動が、チャッピーに届いてほしい。今の私は、もうそれだけで充分だ。

第9話（後書き）

もう3ヶ月以上、連載ができていません。
本当に申しわけありません。
一段落ついたら、また書き進める予定なので、そのときはよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2958d/

サクラ

2010年10月31日14時00分発行